

《第 22 号》「鞆の中にはマイバッグ」

庄司 元(3R 活動推進フォーラム事務局 担当理事)

マイバッグの持参は、ここ数年、生活の中に着実に浸透してきた。だが、レジ袋をもらわないことで、マイバッグ持参の目的が達せられるわけではない。「レジ袋、ノー!」だけで、ごみが大きく減るものではない。

家庭ごみのかなりの部分は、容器・包装ごみである。

このごみの発生源をたどると、日々の買物に行き着く。

マイバッグ持参は、レジ袋に象徴される容器・包装ごみを少しでも減らそうとする「意識」の体現であり、その意識を買物の場に携行することにある。

容器・包装は、商品保護に不可欠である反面、必要以上の手間と材料が使われているものが少なくない。必要最小限の容器・包装商品を製造・販売することは、それが製造・販売のコスト減に繋がる限り、事業者にとってもメリットはある。しかし、そうしないのは安全性などの点で、商品にマイナスイメージを与える恐れがあるからである。消費者がそうした必要最小限の容器・包装商品に対しプラス評価をするようになれば、状況は変わる。マイバッグ持参、「レジ袋、ノー」の意思表示は、そうした商品にプラス評価をする消費者の存在を、事業者に伝えることである。これが大きくなれば、容器・包装を小さくすることに対する事業者の不安は消えていく。こうした変化は、容器包装リサイクル法見直し審議の中で、事業者側からレジ袋の有料化が主張されたことにも如実にも表れている。鞆の中に小さなマイバッグも、大きな力を発揮する。

以上